The Wild Boys of London に関する一考察
― ペニー・ドレッドフル序論

土　屋　結　城

1. 序 ― “The Unknown Public”

Wilkie Collinsが1858年に*Household Words*に発表した “The Unknown Public” は、コリンズがワーキング・クラスの読者層を「発見」した驚きを書き記したものだが、ワーキング・クラスが読むメディアについての関心は新しいものではない。ワーキング・クラスが俗悪な文化を形成しているという懸念から、彼らに良質で安価な読み物を提供しようという試みはすでにあり、19世紀に入ってからのそのような試みの一つとしては、例えばthe Society for the Diffusion of Useful Knowledgeが発行した*Penny Magazine*が挙げられる。その名の通り 1 ペンスで売られた雑誌で、1832年発行の第 1 号は20万部売れたが、次第に売り上げを落とし、1846年に発行中止となる。*Penny Magazine*の失速の一つに、フィクションを掲載しなかった方針が指摘されており、そのため*Penny Magazine*が売り上げを落とした1840年代、フィクションを掲載する方針を掲げた雑誌が複数創刊された。その中で売り上げの上位を占めていたのが、*Family Herald*、*London Journal*、*Reynold's Miscellany*、*Cassell's Illustrated Family Paper*の4誌であり、Andrew Kingはコリンズが “The Unknown Public” で言及している雑誌の一つは*Family Herald*であろうと考えている。

コリンズが、*Family Herald*に代表されるワーキング・クラス向けのジャーナルを目にして驚いた点は主に二つある。一つ目は、“Answers to Correspondents” のコーナーで取り上げられる読者の質問のレベルの低さで

ある。

> At the risk of being wearisome, I must once more repeat that these selections from the Answers to Correspondents, incredibly absurd as they may appear, are presented exactly as I find them. Nothing is exaggerated for the sake of a joke; nothing is invented, or misquoted, to serve the purpose of any pet theory of my own. (Collins 220)

“incredibly absurd as they may appear” とあるが、この欄で取り上げられている質問を “absurd” と見なしているのは第一にコリンズである。このように再三再四、“Answers to Correspondents” の欄の引用には一切手を加えていないと述べなければならないほど、コリンズの目には、取り上げられている質問がばかげたものに見えたということである。

今一つは、これらのジャーナルの遍在性である。コリンズはそれらのジャーナルが “Day after day, and week after week, the mysterious publications haunted my walks, go where I might” (217)であるとまで述べている。“haunt” の語からは、単によく売れている点に驚いているだけではなく、その遍在性を否定的にとらえている様子も読み取れる。

2. ペニー・ドレッドフルをめぐる議論

このようなコリンズの議論に代表される、ワーキング・クラスを対象とする読み物をめぐる言説の中で最も議論かまびすしかったのがペニー・ブラッドとペニー・ドレッドフルである。ペニー・ブラッド、ペニー・ドレッドフルともにその名の通り1ペンスで売られた、連載小説の分冊であり、発行形態に特徴がある。両者ともに、1号あたり8ページないし16ページから成り、週刊で発行された。しばしば1ページ目には大きな木版のイラストが付され読者の目を引いたが、文章自体に目を向けると、毎号の連載の最後が文の途中で終わり、次号でその文の途中から始まるというようなも

のもあった。

19世紀当時は、ペニー・ブラッドとペニー・ドレッドフルの区別はあいまいであったが、近年では、前者が1830年代から1850年代に発行された、比較的大人を対象とした連載分冊、後者が1860年代以降に発行された、主に男児を対象とする連載分冊とおおまかに区別される。前者の代表作としてはG. W. M. Reynoldsの*The Mysteries of London*、James Malcolm Rymerの*Varney the Vampire*、伝説的な床屋のSweeney Toddを描いたThomas Pecket Prestの*The String of Pearls*があり、後者の代表としては、悪名高い盗賊Dick Turpinを描いた*Black Bess, Or The Knight of the Road*が挙げられる。また、1860年代以降に発行された、*Boys of England*や*Boys of the Empire*といった総合的な雑誌がペニー・ドレッドフルに含まれることもある。

ペニー・ブラッドやペニー・ドレッドフルについては、早い時期から懸念が表明されていた。*Penny Magazine*の発行者の1人Charles Knightは1846年にペニー・ブラッドを “diffuse a moral miasma through the land” (233)であると非難しているし、1875年にはAlexander Strahanが “the alarming and dispirit part of the case is the gradual spread, upwards in what is called the social scale, of this sort of trash” (986)と似たような懸念を表している。より激しい攻撃はジャーナリストのJames Greenwoodの著作に見られる。グリーンウッドは次のように述べている。

> Now, it may be fearlessly asserted that there never lived an animal of prey of uglier type than this two-legged creature, who poisons the minds of little children to make his bread. Never a more dangerous one, for his manginess is hidden under a sleek and glossy coat, and lips of seeming innocence conceal his cruel teeth. […] Beware of him, O careful parents of little lads! He is as cunning as the fable vampire. Already he may have bitten your little rosy-cheeked son Jack. (168)

これらの発言に共通するのは、いずれもペニー・ブラッド / ドレッドフルを、

病気のように感染するものと見なしている点と、それが知らぬ間に各家庭に入り込んでいるのかもしれないという恐怖を煽っている点である。さらに、グリーンウッドの攻撃は『種の起源』以降見られる、退化への恐怖を煽る言説とも重なる。

ペニー・ドレッドフルに関する今一つの懸念は、犯罪との関連である。典型的な報道例は “another Whitechapel murder” と報道された事件の犯人、William GowerとCharles James Dobellとの関連を論じたものであろう。*The Saturday Review*には以下のような記事が載った。

> In this case, too, the connexion between cause and effect is so obvious. It is not only GOWER and DOBELL, but scores of others, who are found first reading penny dreadfuls, and then committing crimes or playing at them. (“The Influence of the Penny Dreadful” 458)

しかし、実際にはペニー・ドレッドフルと犯罪の関連はこの記事で指摘されるほど明らかではないはずである。後にHelen Bosanquetが指摘するように、犯罪が描かれている小説を読み、罪を犯すようになるのならば、ウォルター・スコットの本などが真っ先に非難の対象として挙がるはずである(Bosanquet 681)。実際に、ペニー・ドレッドフルに対して懸念を表明した批評家の中にも、犯罪との関連については慎重に論を進める者もいた。後に*Encyclopaedia Britannica*の編集に携わることになるHugh Chisholmは、母親殺しを犯したRobert Coombesという人物に関して以下のように述べている。

> In the house of Plaistow which was the scene of Robert Coombes’s shocking crime, a pile of cheap romances, reeking with bloodshed and all modes of criminal horrors, was discovered, and was immediately and naturally associated in the public mind with the motiveless act for which this wretched boy and his brother have so nearly escaped the gallows. In the pages of these

> "penny dreadfuls" . . . the foulest crimes are discussed and described in a purposely seductive and exciting manner . . . While it must remain uncertain how far exactly this pernicious literature is itself directly a cause of crime, there appears to be complete agreement, except, perhaps, among the writers, that it is bad stuff with a corrupting influence, and that it should, if possible, be stopped. (765)

ここで、チザムはペニー・ドレッドフルを "reeking with bloodshed and all modes of criminal horrors"、"the foulest crimes are discussed and described" と評し、その内容に嫌悪感を示している。しかし、犯罪と結びつける可能性に関しては、"the public mind" はそれを犯罪と結びつけただろうと一般論のように語った上で、"it must remain uncertain how far exactly this pernicious literature is itself directly a cause of crime" の文に見られるように、予想される反論に対して慎重な言葉遣いをしながら、ペニー・ドレッドフルと犯罪の関係は一般に考えられるほど直接的ではないという持論を進めている。

さらに、チザムがこの事件を "motiveless" と評している点も注目したい。この語が示唆するのは、大衆が恐れているのはペニー・ドレッドフルというよりは、説明のつけられない人の心理であり、ペニー・ドレッドフルは空白部分となった動機を補完する一種のスケープゴートにされたということである。

チザムの論文はさらに興味深い点を提示している。彼は、ワーキング・クラスの文化と関連し、現在のロンドンの様子を、"the smaller side streets are often full, out of school hours, of a mob of loafing children" であると描写し、その子供たちは "such disagreeable and pernicious practices as premature smoking and continual spitting" を身につけていると指摘する (771)。喫煙とつば吐きという行為に共通するのは、どちらもその行為から生み出されるもの —煙とつば— が物理的に否応なく領域を侵犯してくるということである。そして、このような事態に陥ることを避けるために、学校を、教員たちが責任を持って生徒たちの勉強だけでなく余暇の時間も管理できるよ

うにある種の “houses” に再編することを提案している。そうすれば、子供たちは “out of school hours” に “the smaller side streets” にたむろすることがなくなると述べている。この提案は彼の使った比喩と一貫している。ワーキング・クラスの子供たちをある種の場所に囲い込むことによって、ミドル・クラスの領域に侵犯してくることを防ぎたいのだ。

これらの論をまとめると、ペニー・ブラッドやペニー・ドレッドフルを非難する言説とは、犯罪を喚起するという恐れよりも領域侵犯に対する恐れの具現化であると言えるのではないだろうか。退化論を背景にサルに例えた論もあれば、動機なき殺人の動機として挙げられた例もあった。これらの例に鑑みると、そのときどきに応じて説明のつかない恐怖を感じた現象に対して、ペニー・ドレッドフルを一種のスケープゴートとして取り上げ、暫定的な説明をつけて安心するという構図も見える。

3. ケース・スタディ — *The Wild Boys of London* をめぐる議論

このように、ミドル・クラスの批評家たちの非難を受けたペニー・ドレッドフルだが、その作品は実際にはどのようなものであったのだろうか。以下、ケース・スタディとして、最も悪名高かった*The Wild Boys of London*（以下 *WBL*）を取り上げ、その特質を考察してみたい。

*WBL*はNewsagents’ Publishing Company（以下NPC）から1864年から66年にかけて全105回の分冊として出版され、1866年に書籍としてまとめられた。著者は不明であるが、*The Bookseller*に寄せられた報告によると、当時NPCのもとで働いていた作家は、Vane Ireton St John、Samuel Bracebridge Hemyng、J. R. Ware、Charles Stevens、W. Thomson Townsend、John Cecil Staggの6人であるため、その6人のうちの1人、ないしは複数が執筆に関わったと推測される (qtd. in Springhall 55)。

1865年に*The London Review*に掲載された “The Literature of the Gutter” と題された記事では、本作は以下のように評されている：“He [The reader] will find . . . that these despised urchins . . . constitute a great moral instrument,

by means of which retribution is brought upon many evil-doers who have escaped the notice of detectives whether boys or men.” さらに筆者は続けて、作品のタイトルにもなっているthe Wild Boys of Londonというグループに属する少年たちは “honest to the backbone, and never do anything offensive to morality” であると述べる。しかし、一方で “the conduct of one or two of them when subjected to certain temptations to which men have been exposed ever since the days of Joseph, leads us to doubt the perfect accuracy of this statement” との指摘も忘れていない (563)。この筆者は、記事のタイトルに表れているように、ペニー・ドレッドフルのような読み物を非難するつもりで*WBL*を手にしたのであろうが、そのような筆者でさえも*WBL*の道徳的な側面を指摘せずにはいられなかったのである。

この記事が発表された5年後、*The Pall Mall Gazette*では、*WBL* ―より正確には*WBL*の再発行版― は “rather favourite . . . with the youth who devour such literature” と紹介されたのち、以下のように評されている。

> Suggestion is an art contemned or unknown to their writers. Not only is there an absence of all effort to write in roundabout and doubtful phraseology, but in almost every case it appears as if the author had never heard of such a process – had no more notion of it than a pig of the decency of pantaloons. (“Thieves’ Literature” 6)

この筆者は、*The London Review*の筆者のように道徳的側面を指摘することはなく、躊躇なく*WBL*を非難している。両者の評価の違いは、一つには前者の筆者が少なくとも物語の半分近くまで読んだのに対し、後者は第33号のみを読んだ印象で語っていることに由来するであろう。

*WBL*を悪名高いものにしているのは、1877年に再発行版が警察によって没収された事件による。第74号までが再発行されたところで、警察が11の売り場を訪れ、計4000部を没収したのである。法廷ではまずThe Society for the Suppression of Viceの代理人Colletteが “at its first start the publication

appeared to be perfectly moral, but after some numbers had been published, a very immoral story appeared, which became worse as the numbers appeared" と証言している (“Pernicious Boys’ Literature” 5)。

一方、判事のFlowersの証言は以下のように報告されている。

> he had seen the books referred to and although they were not so openly obscene as the books generally brought to this Court under Lord Campbell’s Act, still, perhaps, they were even worse in their effect, for they were sufficiently well written not to excite the same disgust the other books did. (“Police” 11)

これらの証言からは、*WBL*をめぐって、先に挙げた二つのジャーナルに寄せられた論考と同様、相反する評価が存在したことがわかる。道徳的であると評する者もいれば、反道徳的であると結論づける者もいる。そして、その矛盾を説明する鍵となるのが、コレットの証言にある “after some numbers had been published, a very immoral story appeared" という指摘であろう。つまり、本作は連載の途中でその性格を開始当初の “perfectly moral" なものから “very immoral" なものへ変えたであろうことが推測される。そして、近年の学術的評価もこの二つの相反する見方の間で分かれている。E. S. Turnerは、*WBL*の猥雑な点に注目した批評を残している一方で、John Springhallはその社会主義的な側面に注目した分析を示した。

3.1. *The Wild Boys of London*における社会批判

では、*WBL*は実際にはどのような物語なのか。本稿では、以上のように二つの相反する評価が存在することを念頭に置きつつ、その矛盾に注目して分析することを試みたい。*WBL*のプロットは、おおまかに、the Brethren of Iron Leagueと、the Companion of Silver Dagger、特にその首領Lord Wintermerleこと Stephen Granthamとの対立を軸として展開する。Stephen Granthamはか

つて先代のLord Wintermerleの正統な後継者Arthur Grattanを誘拐し、そのタイトルを奪った過去があり、この二つの秘密結社はアーサーの正統性を証明する書類を奪い合い、争う。そして、この争いにタイトル・ロールのthe Wild Boys of Londonや犯罪者のSavage Mike、マイクのパートナー Mat the Mongrelなど幾多の人物が絡む。この作品が具体的にどれほど人気があり、何部売れたのかは明らかではないが、全105号まで連載が続いたことや、その後も何度か再発行された事実に鑑みると比較的人気を博した作品であったろうことが推測される。

作品は、作者の激烈な社会批判から始まる。

> Motherless, fatherless, unknown, uncared for, and unpitied, lost and unheeded in this vast city of wealth and famine, their's [*sic*] is a destiny made doubly cheerless by the cruelty of those who might, at least, be kind. . . . Boys themselves, the young of every community and class, will read our book, and that will tell them all they have to do . . . . The adventures of our hero are only such as they themselves may know, and the proud position now occupied by many gentlemen, whose early lives are depicted here, is the best and most simple proof that there is hope for those who are born in the lowest depths of degradation, and proves also that many of the world's future heroes— the great in honour, and the rich in fame—have yet to rise from the ranks of "The Wild Boys of London." (I, 2)

この冒頭からは、本作品執筆に二つの目的があったことが読み取れる。一つは、"unknown, uncared" と描写される人々、特に子供に焦点をあて、社会の不平等性に読者の目を向けさせること。不平等な社会への非難は特に "the cruelty of those who might, at least, be kind" の箇所に顕著である。持てる者が施しをしないことを批判しているのである。二つ目の目的は、読者層の大半を占める子供たち、特に "Boys themselves" を教化することである。そして、この物語が主人公たちの成長物語であることが強く示唆されてい

る。

この段階では、物語の主人公はレンガ職人の息子のDick Laneである。ディックがthe Wild Boysと接触することから物語が動き始める。彼が筆者の主張の代弁者であるのは以下のような場面からも明らかである：“Wandering through the busy streets, Dick could not help thinking it strange that in the midst of a city where there seemed plenty for all and to spare, there should be people dying of absolute starvation” (I, 5). 筆者はディックを通し富の再分配が不十分であることを批判していることになるが、その批判を、あたかも子供が抱いた自然な疑問であるかのように提示することによって、無垢な子供の世界対汚れた大人の世界 ―富の再分配が不十分で、不平等が残されている世界― の二項対立を際立たせている。

ディックは筆者のもう一つの目的、読者の教化にも貢献するような発言をする。以下は、ディックがthe Wild Boys of Londonの一員、Sam the Dolphinと出会った時の会話である。

> “I wish I know’d as much as you, Dick. How did you manage to pick it up?”
> “Mother taught me most, and I read all the books I can get.”
> “So do I; such rattling tales, too – ‘The Black Phantom; or, the White Spectre of the Pink Rock.’ It’s fine, it is; somebody’s killed every week, and it’s only a penny.”
> “That is not the sort of book I mean,” said Dick. “Mother does not like me to read them.”
> “Why?”
> “She says they have a bad influence.”
> “Who’s he?”
> “That means a bad effect.”
> “Don’t know him, either.”
> “You would, if you read proper books.” (I, 6-7)

この両者の会話からは、まず “proper books” を読んでいるディックは文法的に正しい文を話すことができるし、語彙もサムより多い —サムは “influence” という語でさえ知らないのである— という対照性を見せている。

さらに、この会話は自己言及的でもある。サムが言及している物語は明らかにペニー・ドレッドフルである。ディックは、もう少しましなものを読むように勧めているわけだが、今のところ “somebody’s killed every week” というほどの展開を見せていない本作において、“proper books” を読むように述べられている背景には、本作がそのような本の一つであるか、あるいは “proper” とは言えないまでも “somebody’s killed every week” ほどの悪い作品ではないというほのめかしがある。スプリングホールはこの場面に注目し、“an element of beguiling self-parody” (47) があると分析している。しかし、冒頭部分のトーンを念頭に置くと、この場面は “beguiling” であるというよりも作品のスタンスの主張であるととらえる方が妥当であろう。

さらにラディカルな発言が見られる箇所がある。アーサー・グラタンの現在の保護者である学校長のGeorge Meredithはアーサーに以下のように語る。

> The man of true nobility, be he unknown and penniless, has a greater claim to the title of gentleman than half the rich aristocrats. Integrity and truth, a generous heart and a just disposition, with no other pride than that of manhood, are the attributes of a gentleman, and he, however rich, who has them not, is far below the level of the poorest artizan. (I, 19)

メレディスのこのスピーチはフランス革命や後のWilliam Morrisの発言を彷彿させるほどにラディカルなものである。この意見の表明と、別の場所で筆者が述べる “there is […] one law for the rich and another for the poor” (I, 164) という発言を合わせて考えると、筆者は社会の不平等性に憤りを感じ、その改革の必要性を強く訴えているととらえられる。

しかし一方で、筆者は貧しい者たちに等しく同情しているわけではない。以下は、the Wild Boysの描写の一部である。

> The Wild Boys first – the Children of Night and Misery, tattered, meagre, and untamed; full of life, low cunning, and vivacity – a strange mixture of nature and the want of education. (I, 20)

The Wild Boysを蔑んでいるかのような言葉遣い — tattered, meagre, untamed, low cunning — で描写した後、それらの性質を "a strange mixture of nature and the want of education" と結論づけている。natureとnurtureの二項対立を援用した表現であろうが、その二項対立に照らした場合、後天的な教育の欠如は修正され得るが、先天的な "nature" は修正不可能である。the Wild Boysの卑しい性質の幾分かは修正不可能な先天的なものであるという考えがにじみ出ているのである。

またサヴェジ・マイクについて以下のようなことも述べる。

> For the information of naturalists, we may state that this class of the animal creation is gregarious, and has a tendency to frequent the trap-doors outside public houses, corner posts, and other places where a conspicuously elegant lounge may be obtained gratis. (I, 15)

マイクを "this class of animal creation" と述べる口ぶりからは、やはり人をnatureで分類している考えが透けて見える。

このような描写に注目すると、スプリングホールの以下のような主張にも理があると言えよう。

> Most of the serials examined above exemplify the eventual triumph not of working-class but of bourgeois or petit-bourgeois values. […] London low-life fiction worked within the parameters of a melodramatic discourse which

functioned primarily through middle-class ideological constraints. (65)

ここでスプリングホールが述べているように、*WBL*の筆者はセルフ・ヘルプのイデオロギーを擁護している上に、同じワーキング・クラスの者でも、先天的に成長、成功できる者とそうでない者とを区別している。生まれながらの性質によって勤勉である者は、適切な教育を受けることによって—特に適切な本を読むことによって—、“the lowest depth of degradation” から抜け出すことができるが、“the class of animal creation” にいる者は抜け出すことができないのだ。その意味において、筆者はthe deserving poorとthe undeserving poorとを区別している。

しかし、物語が進むにつれて筆者の政治的な態度は消え失せていく。典型例がディックの扱いである。物語の開始時において、先に見てきたようにディックは明らかに筆者の代弁者として動いているが、物語が進むにつれて彼の存在は後景に退き、第33号の第88章 —全体の三分の一弱のところ— を最後にディックは物語に一切登場しなくなる。そして連載の一番最後、第105号の第229章において筆者は突然ディックのことを思い出し、大団円の結末の中でディックは “in a thriving business, keeps his parents in comfort in their advancing years” (II, 478) と蛇足のように付け加える。作品の政治性が減少するにつれ、ディックの登場回数も激減するのである。

3.2. *The Wild Boys of London* における嘲りと性の要素

この政治性の代わりに、物語の中盤を支配するのは笑い —しばしば嘲り— と性的な描写である。その要素の最初に、ミドル・クラス文化のパロディが挙げられる。先にも言及したジョージ・メレディスという名前の登場人物がいたり、ほかにもマイナーな登場人物ではあるものの、Mary Burton [ママ]、James Ruskin、Uncle Silasといった名前の人物が現れる。これらの人物は特に重要な役割を与えられておらず、単に筆者がミドル・クラスの文化と接点があるということを示しているだけであろう。

筆者とミドル・クラス文化とのかかわりを示す上でより重要なのがエピグラフである。筆者は第22章からエピグラフをつけるようになる。そのエピグラフには以下のような注がつけられている。

> In accordance with the rule usually adhered to in works of this distinguished and instructive class, we shall, henceforth, illustrate the most striking passages in each chapter by a quotation peculiar to the subject, and selected from the most popular literary productions, as above. (I, 101)

このエピグラフは断続的に第40号の第99章までつけられ、その後中断するが、Book IIの第19章と52章に再び現れる。ここで筆者が "this distinguished and instructive class" と述べている層が誰を指しているのか注意すべきであろう。

エピグラフを熱心に使ったジャンルの一つに、1ペニーで売られたジャーナル類に掲載されたメロドラマがある。Thomas Wrightは、自身が熱心に読んだ*London Journal*の物語について以下のように擁護している。

> When I had devoured the weekly modicum of fiction I would re-read and sometimes learn by heart these headings in verse, and my impression still is that I got my first liking for poetry from them. (Wright 286)

ライトはメロドラマを擁護し、その効用の一つにエピグラフを挙げている。エピグラフは物語をよりドラマティックに演出するだけでなく、よりすぐれた文学作品へ導く入口になり得るという点において教育的な効果があったと述べているのである。しかし、本作品でのエピグラフはこのような擁護を大きく裏切るものである。

*WBL*のエピグラフのうちいくつかは、単なる "Hullo!" (I, 106) や "Can such things be?" (I, 294) のように無意味である。さらに前者の場合、単に無意味であるだけでなく、筆者によればそれは*Tom Brown's Cool Days*からの

引用であるという。この明らかに*Tom Brown's School Days*のパロディである作品が存在するのかどうかは明らかではないが、少なくとも筆者がオーセンティックな作品からエピグラフをとるつもりが全くないことだけはわかる。ほかに明らかにパロディだとわかるエピグラフには、"Prononverbial Philosophy by M. T. Tupper"、"Ungrammatical Philosophy not by T. F. Mupper"、"Translation from T. F. M." がある。これは、明らかにM. F. Tupperの著作*Proverbial Philosophy*のパロディである。

さらには、テニソンのパロディである "Tenny & son., co" からの引用や "Extract from He-Knock Harden" もある。シェイクスピアも当然ターゲットである。"'Mongrel O! Mongrel O! / Where art thou, mongrel O?' The Poet Lover, etc." といったものや、"'He could smile, and murder while he smiled.' Shakespeare, Villiam" といったエピグラフが見られる。"Unpublished poem"、"Unknown poem" や、あまつさえ "an unwritten MS" といった無意味なものも見られる。

パロディに関して、Simon Dentithは以下のように述べている: "it [parody] can discredit the authority of what has always been said *and* ridicule the new and the formally innovative." (27-8)。この作品においては、デンティスの述べる通り、Thomas Arnold やM. F. タッパーのエピグラフは、"discredit the authority of what has always been said" という役割を果たしているだろう。特に多用されるタッパーは*ODNB*によると、1860年代には "the butt, not only of serious critics, but also of the comic press: his stately platitudes were remorselessly parodied and his name became a byword for banality" になっており、デンティスが指摘するように、タッパーはauthorityになったがゆえにパロディの対象として申し分なかったのであろう。デンティスの指摘の後半部分、"ridicule the new and the formally innovative" は本作のエピグラフには当てはまらないように見えるが、しかしこれらのパロディは先述したようにメロドラマと呼ばれるジャンルの作品を嘲っているとも言える。

物語の中間部分の今一つの特徴は、性的描写の多さである。法廷でコレットが指摘したように、物語の調子は半ばほどで一変する。Book Ⅰの終わり

に向けて、主要な登場人物のほとんどが突然オーストラリアに移住してしまう。スティーブン・グランサムを含む何人かは不自然な裁判の後に囚人として、またほかの者たちは、破産した結果、移民として。そして舞台をオーストラリアに移してからは “aborigines” に対しての差別的な発言とともに、性的な表現、特に女性がレイプされそうになる場面が続出する。以下はグランサムがジョージ・メレディスの婚約者であるLady Isabellaを誘拐し、薬を飲ませた場面である。

> So the food of the poor girl was drugged.
> When he entered her bed-room she was insensible to everything.
> She was lying on her back with her parched lips open, and her white bosom heaving irregularly.
> Stephen Grantham, hot with wine, locked the secret door, and sitting down on the bedside, passed his arm round the girl’s warm waist and kissed her.
> This contact sent the blood coursing madly through his veins, and he was straining her deliriously in his arms, when a loud and furious knocking was heard at the outer door. (II, 70)

レディ・イザベラの “parched lips” や “white bosom” への言及に見られるように、女性の身体の一つ一つのパーツに注目している描写、男性 —この場合はグランサム— の身体反応に注目された描写がなされている点、いずれもこの中間パートの特徴である。さらに、この行為が突然妨げられる —その多くが突然のノックによる— 点もこれらの場面の特徴である。

窃視症的な視点からの描写や男性の身体的反応に着目した描写からは、これらの場面が女性を疑似的に征服する快感を与えることを目的としているように見える。しかし多くのレイプ（未遂）が最後の瞬間に妨げられる点に鑑みると、これらの場面の目的は性行為そのものの描写にあるのではなく、緊張感を引き延ばし、次号への期待を高めることにあると言えるだろう。

女性の描かれ方について興味深い事実を付け加えるとするならば、このような描写がある一方で、ステレオタイプから外れるような女性も描かれている点である。先にレイプ未遂の被害にあったレディ・イザベラは別の場面では男装し、the Iron Brothersのメンバーと対峙し、恐らく発砲したであろうことが示唆される。さらに恋人に捨てられた針子の女性がラルフの目の前で川に身投げする場面を例に挙げたい。

> A tale with which nearly every one is acquainted – a tale of a young girl whose heart and affections had been won by a handsome man, who, after a brief period of enjoyment and love, had deserted his toy for some other and fairer prize.
>
> It was such a tale as Hood has told in his splendid poem "The Bridge of Sighs," though, in his instance, the fatal climax appeared to have been averted by the presence of Ralph Montreal. (II, 287)

しかしこの女性は実はグランサムの愛人であり、ラルフを陥れるためにわざと身投げしたことが後に判明する。読者が "The Bridge of Sighs" 自体をどの程度知っていたかは定かではないが、恋人に捨てられ身投げするお針子というステレオタイプを巧みに使い、読者の予想を裏切る展開にするとともに、ステレオタイプからはみ出す行動的な女性を描いたのだ。もっとも、これらの女性の行動が有機的にプロットに組み込まれることはないため、ストーリー全体を通してみるとこれらのエピソードは埋没してしまい、新たな女性像を提示するには至らない。

3.3. *The Wild Boys of London* におけるアンチ・クライマックス

この中間部分を超え物語が再びメイン・プロットに戻ってくると、性的な場面はほぼ無くなり、政治的な言及が以前よりは少なくなるものの再び見られるようになる。しかし依然として一貫性は欠いており、そればかり

かアンチ・クライマックスの連続になる。典型的な場面は、スティーブン・グランサムの最期の場面であろう。彼は、物語を通してずっと対立関係にあったthe Brethren of Iron Leagueのメンバーの手によって倒れるのではなく、突如読者の前に現れた人物の手によって死ぬ。さらに、その場面は以下のようにたった数行でまとめられるだけである。

> "Bursting open the wicket I [Percival] was upon him in a moment.
> "He had just time to turn and face me, and in another moment there was a flash, a sharp report, and my wife's greatest enemy was lying dead between us!" (II, 430)

長大な物語を通して、絶対的な悪役であり続けたグランサムの最期がこのように事後報告として淡々と ―しかも "a flash, a sharp report" で死んでしまうというあっけなさ― 伝えられるだけなのである。長々と描かれた秘密結社の対立は彼の最期に何の影響も及ぼさなかったことになる。

このアンチ・クライマックスがペニー・ドレッドフルとセンセーション・ノベルを分かつ点であろう。センセーション・ノベルの魅力の一つにはRichard Nemesvariが "each is centred on a mystery that drives the story, and whose solution is meant to resolve all other aspects of the narrative" (Nemesvari 70) と述べるように、謎の提示とその解決がある。しかし、ペニー・ドレッドフルにはそのように物語を駆動する謎は存在しないし、あったとしても、それは解決されないのである。この点を考察する上で、キングがセンセーション・ノベルについて述べた以下の指摘は意義深い。

> The very mess of the serials' form forces readers to participate actively to solve not only the mysteries deliberately set up but also those added by hurried writing and unchecked typography. Often, when the serial ends, many mysteries have yet to be explained – a poignant uncertainty that mirrors the inexplicability of everyday life. (King 47)

キングのこの分析はペニー・ドレッドフルにも当てはまる。矛盾に満ち、かつ、解かれない謎が残ったまま終わる物語は “the inexplicability of everyday life” を反映していると言えるだろうが、読者がこれらの矛盾をそれとして享受し、センセーション・ノベルのように謎の解決を求めないのであれば、物語への反応は必然的に場当たり的、すなわち即時的、身体的なものにならざるを得ない。

ペニー・ドレッドフルというジャンルを考える上で考慮したいもう一つの点が、劇場との近接性である。メロドラマやセンセーション・ノベル同様、ペニー・ドレッドフルの作品も演劇として上演された。本作では、第3号からすでに “The right of dramatization is reserved” と告知されている。作品自体にも観劇を楽しむ登場人物たちが描かれる。例えばthe Wild Boysはドルリー・レーン・シアターで “six pence each for the upper gallery” (I, 330) を支払い観劇するし、また別の箇所では “the Vic” で何が今上演されているかを話す。これらの描写からは、ペニー・ドレッドフルについての考察は、必然的に演劇などの他ジャンルとの関連性の考察を伴うことが示唆される。

4. 結論

このように本作を読み解くと、ペニー・ドレッドフルとミドル・クラス文化とのかかわり —パロディとして馬鹿にしている場合もあれば、演劇というジャンルにおいて接していた可能性もあった— が浮かび上がってくる。確かにスプリングホールが指摘したように、社会主義的な言説が見られる作品であり、それがかえってミドル・クラスの批評家たちの恐れを煽った面もあろう。また、エピグラフに見られるような攻撃的とも言えるほどのパロディが危険に感じられた面もあったであろう。しかし、それだけではなく、コリンズが1ペニーのジャーナルを初めて見た時に抱いた恐れ、あるいはチザムが指摘したような恐れ、つまり領域侵犯の恐れが根拠のないものではないことが明らかになったとも言える。すなわち、ペニー・

ドレッドフルがミドル・クラス文化と近いところにあり、喫煙やつば吐きのように、ミドル・クラスの領域に忍び込んでくる可能性が高い点が危険視されたと言えるのではないだろうか。ペニー・ドレッドフルは、ミドル・クラス文化とワーキング・クラス文化との交差に位置づけられるような文化産物であり、その全容を解明するにはより広い文化の中での位置づけを考える必要があると言えよう。

Works Cited

"The Influence of the Penny Dreadful." *Saturday Review of Politics, Literature, Science and Art* 66 (1888): 458. *British Periodicals*. Web. 19 Nov. 2014.

"The Literature of the Gutter." *The London Review of Politics, Society, Literature, Art, and Science* 11 (1865): 562-63. *British Periodicals*. Web. 16 Jan. *British Newspapers 1600 -1950*. Web. 16 Jan. 2015.

"Pernicious Boys' Literature." *Reynold's Newspaper* 9 Dec., 1877: 5. Web. 16 Jan. 2015.

"Police." *The Times* 13 December, 1877: 11. *The Times Digital Archive*. Web. 30 Oct. 2014.

"Thieves' Literature." *The Pall Mall Gazette* 5 April, 1870: 6. *British Newspapers 1600-1950*. Web. 21 Jan. 2015.

The Wild Boys of London : Or, the Children of Night. A Story of the Present Day. With Numerous Illustrations. 2 vols. London: Newsagents' Publishing Company, 1866. *Historic Texts*. Web. 21 Oct. 2014.

Bosanquet, Helen. "Cheap Literature." *The Contemporary Review* 79 (1901): 671-81. Print.

Chisholm, Hugh. "How to Counteract the 'Penny Dreadful'". *Fortnightly Review* 58 (1895): 765-75. *British Periodicals*. Web. 9 Dec. 2014.

Collins, Wilkie. "The Unknown Public." *Household Words* 18 (1858): 217-22. *British Periodicals*. Web. 9 Dec. 2014.

Dentith, Simon. *Parody*. London: Routledge, 2000. Print.

Dingley, Robert. "Tupper, Martin Farquhar (1810-1889)." *Oxford Dictionary of National Biography* (2004). Web. 14 Sept. 2015.

Greenwood, James. *The Wilds of London*. London: Chatto & Windus, 1874. Print.

King, Andrew. "'Literature of the Kitchen': Cheap Serial Fiction of the 1840s and 1850s." *A Companion to Sensation Fiction*. Ed. Gilbert, Pamela, K. Chichester: Blackwell, 2011. 38-53. Print.

Knight, Charles. “Address to the Reader.” *Penny Magazine* 31 (1846): 231-34. *British Periodicals*. Web. 9 Dec. 2014.

Nemesvari, Richard. “Queering the Sensation Novel.” *The Cambridge Companion to Sensation Fiction*. Ed. Mangham, Andrew. Cambridge: Cambridge Univeristy Press, 2013. 70-84. Print.

Springhall, John. *Youth, Popular Culture and Moral Panics : Penny Gaffs to Gangsta Rap, 1830-1996*. Basingstoke: Macmillan, 1998. Print.

Strahan, Alexander. “Bad Literature for the Young.” *Contemporary Review* 26 (1875): 981-91. *British Periodicals*. Web. 9 Dec. 2014.

Turner E. S. *Boys will Be Boys: The Story of Sweeney Todd, Deadwood Dick, Sexton Blake, Billy Bunter, Dick Barton, et al*. London: Michael Joseph, 1975. Print.

Wright, Thomas. “Concerning the Unknown Public.” *Nineteenth Century: A Monthly Review* 13 (1883): 279- 286. *British Periodicals*. Web. 9 Dec. 2014.